（1） 昭和42年2月24日 国鉄東局特別扱承認新聞紙 第490号 昭和40年3月8日第三種郵便物認可（毎週一回金曜日発行） 1968年11月15日 第152号

☆反帝闘争を
プロレタリア日本革命へ！
☆プロレタリア世界革命の旗の下
共産主義者同盟に結集せよ！
共産主義者同盟

11月15日 週刊 第152号 編集発行人 佐々木和雄 一部 20円 購読料 1部20回500円

戦旗

戦旗社
東京都千代田区三崎町2ー7ー6 南沢ビル内 電話代表 03（264）2961 振替（東京）26110
大阪支局 大阪市福島区鷺洲本通り1ー16 北村ビル 電話06（458）6597
京都支局 京都市左京区下鴨宮崎町128ー29（075）（701）0025
名古屋支局 052（732）3553

11月22日／全国学生総決起東大集会（東大本郷・午後二時）
／神戸港 軍事 使用 軍需物資輸送 阻止闘争（神戸市役所・午後六時）
24日／成田現地闘争（三里塚第二公園・午前十一時）
30日／全関西政治集会（中小企業会館・午後六時）

一月訪米ー三月軍事演習の粉砕にむけて 全戦線の総点検と強化を

10・21闘争が切り拓いた新局面

防衛庁突入闘争を先頭とする10・21日本における国際反戦闘争の位置は次の如く総括された。

第一。ベトナム革命戦争・ベトナム反戦を主導軸とする国際階級闘争の停滞小局面を突破する国際的前衛的闘争。

すなわち、とりわけ帝国主義国における革命的暴揚が六七ー六八年前半に、米黒人叛乱、戦闘争、ドイツSDSの闘争、フランス「五月革命」に代表された局面は①ベトナム革命闘争とOLAS路線の普遍に見る後進国ー「労働者国家」の世界革命戦争ー世界プロレタリア独裁への実質的展開の限界性を突破し、②帝国主義国におけるベトナム反戦の徹底化の個別性を乗りこえゆく里程標であった。この停滞・後退・敗北は、同時に革命的分化として、スターリン主義党と離別しつつ自らの革命闘争をきりひらいてきた諸ヘゲモニーが、侵略・反革命と対決し、そのもたらす階級危機を革命に転化する攻勢的戦略で党的に確立し、国際的結合を闘いとることによってのみ革命的転換がなしうるものであった。この趨勢への歴史的立ちおくれこそ、米・独・仏において、ジョンソンぎまん北爆停止声明、西独非常事態法、ドゴール勝利後の、そしてとりわけチェコ事件後のラディカリズムの後退＝分解を革命的に再編する試錬を強いているものである。この方向性は、8・3国際反戦集会へのわが同盟基調提案で示された。そして、日本において、総選挙、自民党の議会制的勝利の幻想と粉飾をうちくだいて、帝国主義国における侵略、反革命対決の尖端をきりひらき、国際的普遍化の第一歩を闘いとった。

第二。侵略・反革命対決＝階級危機の形成は、安保粉砕全国ー中央権力闘争の端緒が政府危機の始まりを不可分に促進することとして、10・21闘争が 証明し はじめた。

すなわち、安保粉砕を侵略・反革命対決の全人民的政治闘争焦点として現実化し、わが同盟はその内実を自衛隊海外派兵・日米反革命軍事共同行動の強化ととらえ、一月日米会談阻止ー三月自衛隊三軍演習闘争への突破口として、防衛庁闘争を設定、貫徹した。この中枢への攻撃は、①10・21闘争が安保粉砕の攻撃的態勢を現実化しはじめたことに対する集会・デモ禁止をのりこえて闘いぬかれることによって、ブルジョア議会制的統治の破綻の自己暴露ー政府危機の始まりを伴い、安保粉砕＝「まずます密集する反革命」の軍ー自民党帝国主義政府打倒への永続性をきりひらき、②かつ、武装蜂起ーマッセンストに対応する現在形態、中枢攻撃ー中枢神経系統マヒを、防衛庁闘争ー御堂筋・新宿の連関として明らかにした。（新宿闘争は、革共同、ML派等の米タン闘争（ベトナム反戦の一課題）の個別性に枠をせばめた全人民的政治の方向性への無自覚、中枢攻撃に結合すべき占拠闘争論的位置に関する盲目性を、この闘争自体及び安保粉砕を意識として結集した巨万の大衆がのりこえたものとしてあり、この自然発生的のりこえは、安保粉砕、中枢攻撃闘争によってのみ、政治的組織的方向が高度化される。

第三。社民の危機は、この安保粉砕の大衆的自然発生性に対し、ヴェトナム反戦の枠の固定化のなかで、大衆に対する統制、権力への屈伏を、合法集会、デモ、騒乱罪適用への同意、闘う労学市民の排除としてふみだし、いっそう深化の過程に突入した。

このことは、革命的左翼の攻撃、これに対する政府危機の進展が帝国主義的存亡をかけた強権の道を不可避とすることが、社民の存在そのものを問い、革命的階級形成は反帝統一戦線の実現による左からの分解の促進＝安保粉砕・権力闘争への政治的組織的結集として形されねばならぬ。この根本課題に関し、革命的左翼の統一行動の前進（10・8）も10・21の即自的連関に終った限界の克服が権力闘争の局面における闘争論的一致を環とすることを鋭くつきだしたのである。

かかる点をふまえて、10・21の切開しつつある局面を六九年以降安保闘争により飛躍せしめるべく、11・7首相官邸突入闘争を提起し、中核派、ML派、四トロ派の四派統一闘争として貫徹された。これは、次のごとき成果と教訓を明らかにした。

11・7連続闘争の成果と教訓

第一は、騒乱罪適用化にあって安保粉砕第二波を、中枢攻撃闘争として、諸党派結束して、闘われたことである。これは10・21からの画期的前進である。権力弾圧に対する攻勢的反撃として、かつ、中枢攻撃という闘争形態における一致として。

第二は、この攻勢的反撃の一致が、具体的な戦術環を明確に画定した展望の一致をもっていない点に、かつ、沖縄闘争の安保闘争との結合関係の不鮮明さのゆえに、これだけで持続性をもちえていないことである。

第三は、われわれにあっても、10・21の国際性の継承発展が、米大統領選、その反動的結果をそれによる全般的な侵略・反革命再編との先制的対決として、沖縄、自民党総裁選を内包した11・7の政治的位置を鮮明にしきれなかった点にこそある。

第四は、三度にわたる首相官邸前激突を闘いぬき、文字通り日帝権力中枢部に組織された暴力闘争を突きさしたのである。それは、11・7を騒乱罪粉砕に自己目的化そうとした革共同中核派等の設定をこえて、全国闘争を従えた中央闘争の意義性・型に生かされるべきものである。そして、いっそう結束し、断乎たる攻撃闘争のためには、統一行動の深化を単一性をもった行動戦術・部隊編成・指揮にまで諸党派間で意志一致して臨むべきことを教えている。

かかる、昨10・8ー11・12以来の実力闘争の常態化を更に質的に高度化した今10・21ー11・7闘争後の局面は、しかし、より明らかな具体性をもって展開する国際国内侵略・反革命 命態勢と対決を、革命への展望をもった計画された闘争として推移されればならない。

「ニクソンー和平」と国際階級闘争

アメリカ大統領選結果は、ニクソン勝利、ウオレス一千万得票のなかに、黒人叛乱、自国侵略反革命戦争対決闘争によって きりひらかれた米国内外にわたる侵略反革命の統合の破綻に対する、ホワイト・バックラッシュ（中産階級の反動化）としてのファシスト・アクション化）に基づく最後の強権による階級対立非和解性の増大と世界戦略の再統合への道を露わにしだと云うべきであろう。

これは現局面で、11月北爆停止声明＝ヴェトナム「政治解決」の進展過程が、次のごとき戦略的対決にとってかわられるべきことを意味する。

第一には、すでに、10・21闘争（日本）がそうだったように、侵略反革命対決の環「安保ーNATO粉砕、ヴェトナム革命勝利」への結集に、いっそう帝国主義国内のヴェトナム反戦の止揚をめざすこと。

第二に、NATO改編の具体性は、ド・ゴール・フランスの欧州における地位失権、西独の非常事態法による国権強化がチェコ事件を媒介に対米自主で西欧を統括しNATO盟主、対東独・対東欧侵略を展望させ、それは、対ソ抵力優位、西欧自主独立のニクソン戦略と結合することにある。

第三に、市場再分割を進めてきた西独帝が対米自主ー西欧統括、対東欧圏侵略反革命をNATO反革命同盟強化を米に強い、結合を強めるところの外交原則が、日帝の客観的地位からは同質たらざるをえないことである。この表現こそ、九月日独外相協議における合意と、核防条約に対する「挑戦」である。日帝は安保の内実を侵略＝海外派兵、反革命＝日米共同軍事行動として、対米自主、対米組合、対亜侵略を統一し、ニクソン戦略と結合する。そこに はすでに、安保堅持・拡大の実質が、沖縄を日帝侵略基地化＝日米共同軍事基地化の帝国主義的「返還」の陰謀、朝鮮危機への対応、SEATOの無実化をASPAC等を軸に新共同防衛機構化する計画として進展している。これに突進する日帝の態勢は、11・27自民党総裁選ー新政治委員会によって確立する。

われわれは、ヴェトナム「和平」「政治的解決」に反対し、ヴェトナム解放闘争を世界革命戦争に転化し、民族解放・社会主義への徹底性を要い同志的連帯をもって一貫してヴェトナム人民に要請しなければならない。そして、それは侵略・反革命対決の帝国主義国下プロレタリア人民の闘争が、10・21闘争の圧倒的拡張堅持飛躍として普遍化さるべきことが眼目であることを欧米プロレタリア人民に訴えねばならない。その実現は、わが同盟の国際的党活動によるとともに、日本における安保粉砕・権力闘争によって、実体的にけん引されることを確認しなければならない。「後進国」にとってかわる「先進国」プロ人民のヘゲモニーが、日本安保闘争の国際的前衛性であるが現局面であり、世界同時革命への成熟への永続性が、主体的には、世界党ー統一戦線形成と、日米、欧米共同闘争の実現に媒介されるということである。

革命党再建へ 更に飛躍せよ

十一ー十二月、われわれは全面的に組織闘争を完遂しなくてはならない。

10・21に代表的にあらわれた戦闘的大衆の政治・組織状況は、安保粉砕を自らの政治的対決点とし、ストライキ、戦闘的ジグザグを通して社民ー民同の統制的行動を部分政治的にしあげ、その枠をはみだして巨万の群衆の自然的反権力行動として現象し、その核心に地区反戦ー全学連が 位置していることである。そして更に決定的に注目すべきことは、反戦青年委（地区ー職場）のヘゲモニーが産別ー職場で飛躍的に拡大されてきたことである。こうした動向こそ、基幹産業（全逓、電通、動労、日通等）の組合・企業連を総評協議会化し、新ナショナル・センターを展望する組合官僚の「労働問題研究会」や、岩井の社共共闘を枠とする権力への屈伏、革命的左翼排除や、社会党の独自路線にもとづく革命的左翼排除に対決する力である。

最も先進的な闘争・組織の教訓にまなび、膨大に拡張してきた基盤を地区反戦ーその職場編成としなければならない。その核は、現在の地区反戦であり、全学連と結合した全国闘争機関、統一戦線闘争機関の展望を、反帝統一戦線の形成にもとづく、全国地区反戦連合の確立、全学連の統一を軸に設定しなければならない。

地区反戦圧殺の権力攻撃と社民・日共の陰謀と断平闘い、かつ、社民の許容する反戦再編への動揺をうちくだいて、現地区反戦への結集を大胆におしすすめ、職場に基底を確立するのでなければならない。この橋頭保士の堅持・拡大が、中枢権力攻撃ーマッセンストライキをうちぬく不可欠的前提である。

そして、かかる闘いの任務に、わが同盟は、七回大会以来の地区党建設の飛躍的前進をふまえて、更に首都団地区党の強化をもってこたえるであろう。このうえに立って、われわれは、いまや青年同盟の結成が成熟しており、その実現をもって、権力闘争部隊を創出するべく、革命的プロレタリア・人民の結束をよびかける。

かかる地区党ー青年同盟建設による地区反戦の根本的強化と同時に、十一～十二月段階での組織点検ー拡大の一方の軸に、学園闘争の指導ヘゲモニーの強化を通しての社学同の拡大を実現しなければならない。

日大、東大闘争の現局面は、個別学園闘争の枠の中での解決が不可能であり、国家ー社会との永続的な闘いへと浮びかれる指導性が要求され、かつ、この二大学に止どまらず、中大、明大もかかる性格の闘いへの決起が要求されている。まさに拠点学園を網羅した本格的な階級攻防戦が、この十一月から展開されねばならず、神田ー本郷一帯のマッセンストライキへと発展させ、この学園闘争のるつぼの中で、中央権力闘争の最先端に立って闘い抜いた社学同が強化拡大されると一方での 学園 闘争の発展と同時に、一月日米会談阻止へ向けての意志統一が獲得されなければならない。

反戦ー全学連のかかる闘いを通して実現される一月闘争こそ、ニクソン就任式阻止ー各国首脳の訪米阻止としての国際共同闘争における最前衛的位置を10・21に引き続き明かにするものとなり、NATO、安保粉砕、ベトナム革命勝利の国際反帝統一戦線形成の巨大なステップとなるのである。

11・24成田現地へ総結集せよ
反対同盟とともに ボーリング阻止を

本紙前号での現地派遣団か[illegible]アピールで報じたように、6[illegible]闘争に続く成田現地闘争が十[illegible]二十四日に決定した。

われわれが、ASPAC闘争ー国際反戦会議から一連の基地ー反合闘争を闘い、それらを10・21の対中央権力ー防衛庁闘争として七〇年安保粉砕闘争へ至る核心的闘いを展開している中にあっても、本紙で報告してきたように現地成田では政府ー公団ー千葉県に対する非妥協的闘いを継続し、一層強めてきた。

このような現地の闘いは、政府ー公団を追いつめ、条件派を今、大きく動揺させている。一部ブルジョア新聞も、つい最近、条件派への代替地造成工事が一歩も進まず、それを請負った千葉県と公団との間で責任のなすりあいを行っていることを暴露せざるをえない程である（11月3日「朝日」朝刊）

11・24現地闘争は、かかる中にあって、後退しつつも四千米滑走路予定敷地のボーリングの強行によって工事認可へなんとかこぎつけようとする政府ー公団に対して全学連・反戦と現地反対同盟が総結集して、その野望を粉砕し、七[illegible]戦列の強化拡大と[illegible]を一層押し拡げる[illegible]されなければならない。

現地反対同盟は、この闘いに向けて、次のような招請状を全国に発し、また、十月十六日には「成田市民を守る会」と共催し、地区労にも呼びかけて成田小学校で集会を開催し、受け入れ準備を進めている。

われわれは、現地反対同盟に応え、また、日帝のアジア侵略ー自衛隊の海外派兵への拠点形成粉砕を一月日米会談ー三月自衛隊演習粉砕の不可欠の闘いとして位置ずけ、宣伝し、現地への結集態勢を確立しなければならない。

70年安保＝日帝の侵略と抑圧の強化、日米反革命同盟の強化を許すな！

日帝のアジア侵略の拠点、農民抑圧の成田空港建設実力阻止！

沖縄と ならぶ七〇年「自主防衛」安保の要＝成田空港建設実力阻止！砂川・成田を中心に、全学連・反戦と結合する農民の全国闘争組織をつくろう！

11・24の招請状（反対同盟）

全国の労働者、農民、学生、市民の皆さん。

三里塚芝山連合反対同盟は、来る十一月二十四日、三里塚空港粉砕・ボーリング調査実力阻止全国総決起集会を開催することを決定しました。

空港建設阻止の闘争開始以来三年間、政府公団の農地収奪と戦争加担の攻撃内容はますますはっきりしてきております。

国際空港と銘うって建設しようとしている空港は、一部支配者のものであっても、大衆にとっては、今日、耐え難い犠牲と圧迫を強いられる政策の一つであるといわなければ なりません。

永年、国策の犠牲となってきた我々農民は農地収奪という農民の存亡を危うくさせるこの政策を満身の怒りをこめて弾劾せざるをえません。

本年四月中旬来、現地三里塚と芝山には三ヶ月間に亘って機動隊が常駐し、彼らのいう実力行使によって農民に対するあらん限りの暴力をふるってまいりました。

しかし、我々三里塚芝山連合反対同盟農民は、こうした圧迫を受けながらも、これを黙って甘受することなく、「農地死守・空港建設実力阻止」の決意を固くして、今日まで政府公団の攻撃を一歩も許すことなく闘ってまいりました。

建設をあせる政府側は、来年三月の工事開始を前に十一月に入り、再び現地への立入りを激しく行い、本日まで既に三回の闘いが行われております。政府側の狙いが遅れている用地買収とボーリング調査開始にあることは明きらかなことであります。

決意をこめ、生活の全てをかけて闘う三里塚・芝山農民はここに再び政府公団に対する抗議の全国的闘いを行うことを決意いたしました。

全国の労働者、農民、学生、市民の皆さん

来る十一月二十四日、全ての皆さんが三里塚に集り、三里塚芝山連合反対同盟とともに三里塚空港粉砕・ボーリング調査実力阻止の闘いに参加されるよう心から要請いたします。

一九六八年十一月九日

記

集会名 11・24三里塚空港粉砕・ボーリング実力阻止全国総決起集会
日時 十一月二十四日午前十一時集合、十二時開会、午後二時デモ出発
場所 三里塚第二公園
主催 三里塚空港反対三里塚芝山連合反対同盟
支援団体 各位

12・11集会をかちとろう
プロレタリア党建設への結集を

防衛庁攻撃を頂点とした10・21闘争は、停滞状況の国際反戦闘争を「自国帝国主義打倒、安保・NATO粉砕、ベトナム革命勝利」にむけてけん引した。

だが、もとより、かかる戦闘態勢の確立は、七〇年安保闘争ー七〇年代階級闘争への展望、すなわち、安保粉砕を反帝闘争の一大焦点として 闘い抜き プロレタリア世界革命への永続的主体的展望を明確にすることによってこそ、かちとられるべき、極めて根底的な内実の確立としてとらえられねばならない。それは、一九五八年十二月十日、共産主義者同盟の結成とその後十年間にわたる闘いの総括、なかんづく、プロレタリア党建設とそれに領導される階級闘争の戦略戦術の追求として獲得された総括を武器にして切り拓かれる攻撃的展望であり七〇年闘争こそは十年の蓄積を賭けた闘いである「12・11中央政治集会」は、わが同盟が、かかる主体的任務を自覚して提起する七〇年安保粉砕への本格的起点である。

12・11中央政治集会
主催 共産主義者同盟
日本帝国主義打倒、安保粉砕
日時 12月11日（水） 五時半開場
場所 豊島公会堂（国電池袋駅下車東口徒歩五分）
講演 安保闘争と世界革命への展望 同盟議長 佐伯 武
あいさつ 全学連反戦青年委、砂川反対同盟、三里塚芝山連合反対同盟他

首相官邸へ戦闘的デモ
11・7安保第二波闘争に決起

十一月七日、「沖縄闘争勝利、一月訪米阻止」安保第二波、全学連統一集会が、中央大学中庭で午後五時から行なわれた。

集会は、中核、全学連委員長、全都学生解放戦線、社青同国際主義派が闘う意志表明を行ない、最後にそれらをまとめる形で、全学連委員長・藤本敏夫君から発言があった。「10・21闘争において、われわれは、安保粉砕の第一歩を現実的に踏み出した。防衛庁闘争を頂点とする新宿ー御堂筋ー国会闘争は、国家権力をして騒乱罪適用に追いこんだ。権力の10・21以降の反革命弾圧態勢の強化再編に対して、安保粉砕・日帝打倒をめざし、本日の闘争をより強力に、首相官邸にむけて展開しなければならない。更に続けて「沖縄闘争は、一部の 諸君のいうように 沖縄奪還、沖縄解放 としてでは なく、『沖縄 米軍基地 撤去、米軍政打倒』日帝の侵略前線基地化阻止』のスローガンの下に明確に位置付けて闘うべきである」と発言した。

午後六時すぎ地下鉄で銀座に向った約二千名の全学連部隊は、ヘルメット、丸太棒、ゲバ棒で武装し、数寄屋橋、新橋から虎の門交差点と、その隊伍を進めた。10・21において全学連・反戦と大衆の圧倒的行動の前に粉砕された機動隊は、弾圧態勢を強め、七千五百人の機動隊員を動員し、霞ヶ関から永田町一帯に大弾圧の布陣をひいていた。しかし、赤いヘルメットを中心とする全学連部隊は、特許庁横から首相官邸への坂道を登っていった。首相官邸前の三年町交差点に機動隊は装甲車、放水車を敷き、道路を完全にふさいでいる。また、首相官邸のコンクリート塀の鉄柵には、あのジュラルミンの楯が一面に並び、にぶい銀色の光を放っている。隊列を整えなおした全学連部隊は、首相官邸に突入すべく、装甲車を突破しようとする。それとほとんど同時に機動隊は、放水をはじめ、更に強力な催涙剤の粉末を噴霧器で放射しだした。そして後と横から機動隊が迫ってくる。この大弾圧に対して、投石、ゲバ棒でもって対抗するが、敵の物量の前に一時的後退を余儀なくされ、反戦青年委と合流するために、日比谷野音に午後八時すぎ引き返した。

11・22 全国総決起を東大で
東大・日大 共両闘会議がよびかけ

19日夜、東大全学共闘会議、山本義隆代表と日大全学共闘会議・秋田明大議長が共同記者会見し、「来る22日、東大で全国学生総決起集会を開く」と発表した。これは東大、日大両闘争の初の公然たる連帯行動であるばかりでなく、学園の大衆戦闘組織がナショナリズムを超え全国学友の総結集を公式によびかけたものとして日本学生運動史上初めての壮挙である。

日比谷で三千名の集会
全学連と合流、再び官邸へ

集会は中央反戦・田宮君と八王子反戦代表の司会で進められた。佐藤秋雄世話人をはじめとする東京反戦の諸代表の挨拶の途中で、この集会に先んじて六十台の装甲車に囲まれた首相官邸を攻撃してきた全学連の二千の部隊が再度の進撃に向かうべく到着し、満場の拍手のうちに迎えられた。

九時デモ出発。赤ヘルメットの全学連の部隊がゲバ棒と石で再武装し先頭を切って日比谷を出発、中核派、ML派の学生などは前回の機動隊との衝突で消耗しながらもこれに続き、最後に反戦が赤ヘル、白ヘル混合で長蛇のスクラムを組み首相官邸をめざす。霞ヶ関交差点から国会ー首相官邸へ向かう坂上に立ちはだかる装甲車[illegible]

首相官邸前に立ちはだかる装甲車・機動隊に対する全学連

お知らせ

ブルジョア政府の大衆収奪政策とブルジョアジーの価格吊り上げ策（含む、印刷ブル）は、わが戦旗社の機関紙業務財政にも最近、とみに容赦なくおし寄せ、われわれをして、財政危機にたたしめるに至った。

われわれは、この財政危機を早急に解消し、戦闘的青年労働者学生に機関紙を恒常的定期的にルートしぬくために、紙代引きあげの 諒承を一方的 とはいえ、紙面通知をもって、お願いしたい。

新しい紙代
★手渡し ・一部20 回四〇〇円、40回八〇〇円。
★郵送 ・一部20回 五〇〇円、40回一、〇〇〇円・二部20回九〇〇円、40回一、八〇〇円・三部以上、一部につき20回 四〇〇円。
★密封送 ・一部20 回七〇〇円。
（注）すでに納入済みの紙代については、旧来の算定基準で取扱い、紙代が切れてのち、以後新紙代を採用し、請求します。

十一月十一日 戦旗編集局

安保粉砕の統一戦線を（下）
戦略と大衆闘争をつなぐ環＝統一戦線

七〇年安保と統一戦線

10・21闘争と再編「三派」運動

昨年の10・8～佐世保にいたる萌芽的武装闘争が、革命的左派に賭した重苦しい試練、4月以降の後退期における戦略ー統一戦線ー大衆闘争における、諸党派の混乱の結果としての6・15～全学連大会での諸問題は、10・8をめぐる革命的左派の努力と、なによりも10・21闘争を経ることによって、より高次の次元での統一戦線への条件を、生み出している。

10・21における全人民的な政治闘争の現揚が、安保粉砕の第一波としての、客観的性格を付与せしめていること。防衛庁闘争を頂点とし国会は勿論新宿すらが諸党派の米タン路線をのりこえた、大衆の『安保 粉砕、鉄道占 拠中央闘争』として中央権力をめざす闘いとして闘われ、それは11・7首相官邸闘争へと、より統一されたことである。あるいは又、革マル・社民とのゆ着を強めてきた解放派の諸君が、大衆の現揚に おされ"武装"しなかったとはいえ、10・21を中央闘争として独自に闘い岩井声明等総評・民同の反革命進行等の中で、いわゆる三派運動の革命的再編への問題が新たに提出され始めていることである。

これら総体を、来年一月を突破口とする血みどろの死闘を闘いぬく、強固な統一戦線へと高め、全学連ー全国地区反戦連合ー党派間統一戦線を確立してゆかねばならない。だからこそ、今、逆に統一戦線をめぐる総括が全党派に要求され、いわゆる三派運動の革命的意図の相互確認にもとずく、6・15／全学連大会／地区反戦分解の止揚が差し迫るものとなっているのである。

われわれは、6・15～全学連大会に到る事態が、日韓、砂川に到る統一行動が、10・8以降の社・共より完全に独立し、敵武装権力機動隊との暴力的闘争から自衛隊との対決をも展望した、左派の闘いの新たな地平のもとで、統一行動から革命のための統一戦線へと高めねばならない時点で、その重荷と戦略的展望を提起し切れない限界として、基本的な総括をしてきた。

反帝統一戦線の路線内容

当面の行動の一致から、世界革命・日本革命・武装蜂起へ 接近し、日本階級闘争を領導し切る反帝統一戦線の最低の路線内容は、第一に全世界階級闘争における革命の現実性を前提とした、国際反帝統一戦線の一環乃至それを領導する意識性である。そして、その質は、国独資論から帝国主義論への転換、帝国主義打倒の内容を、軍事同盟と軍隊の解体、安保軍・NATO軍解体の一環としての自国帝国主義軍隊にその環を求めることであり、ベトナム反戦闘争から安保・NATO闘争への転換とあいまち、後進国、日本、アメリカにおいて進み、ヨーロッパにおいて最も遅れている内容である。（我々はこの安保軍・NATO軍打倒の国際的闘争の日本における戦略としてアジア派兵ー自衛隊の帝国主義軍隊化を粉砕し、全人民の武装、自衛隊解体を設定している）

第二には革命の型としての武装蜂起、あるいは中央権力闘争と地区ソヴェト、マッセンストライキとの連関である。

この 問題は、最終的に権 力奪取ー武装蜂起に向う過程で、全党派を動揺に叩きこむ（フランスのごとく）内容で ある。解放派 の「街頭武力闘争と地域権力（革命17）」と地評とのゆ着が問われるのがここである。ML派の人民戦争ー解放区運動、中央権力闘争ー解放区建設（地区ソヴェト）のわれわれとの逆転が、階級闘争の急速な発展への立遅れをもたらすであろう内容もここにある。（中核派に関しては不明）。

だから 我々は、最低限、単産 ゼネストー労働組合機構の革命機関化論に対する地区ソヴェト（解放区、その拠点としての生産点）路線に対する一致をかちとってゆかねばならない。そのことは実践的には地区反戦運動の総評、地評よりの 独立性確保、地区反戦 運動の産別運動への解消運動からの防衛を、革命的左派の任務とし、東京地区反戦の混乱の止揚の一歩とするのである。

第三に、これらのことは、革命的左派における反帝統一戦線と社民、地評、その他に対する統一行動との区別と連関を明らかにすることでなくてはならない。国際階級闘争と街頭暴力闘争と地区反戦運動という、10・8以来の質と型が、武装蜂起との連関を抜きにしては語られなくなった以上、これを担う革命的な派の団結の質の高度化が、社民諸派、労働組合上部機構に対する共同の歩調をとりうるまでに、発展しなくてはならない。（後に述べるごとく、6・15問題に対する我々の基本的視点は一般的集会破壊暴力云々ではなくこの点にこそ求められなくてはならない）

第四に、「統一戦線を通してソヴェト」という所の内容、統一戦線の原則問題が、大衆組織の当面の行動一致にひきもどされるか、政党間の階級的協定、党派間力学に規定されるかの両者を止揚することの一致である。このことは開始された階級闘争が、権力闘争を内包することによって、大衆自体が闘争への参加に当って戦略ー党派を要求するという構造に規定されている。党派も又、大衆組織を媒介とした闘争を、戦略をかけた闘争として展開するが故に、軍事技術上の信頼までうちたてた党派関係と大衆組織におけるヘゲモニーを通した上からの統一戦線を、大衆闘争それ自体が要求する戦略選択と統一行動への要求にもとずく下からの統一戦線の両者を統合するものでなくてはならない。当面の行動をめぐって日韓・砂川で形成された全学連・反戦の10・8以降の分解は、だから上からの、政党間の統一戦線にもとずく軍事技術から大衆闘争に至る統一行動と戦略闘争の指導をぬきにしては止揚されないのであり、かかる協議機関の確立（すでに実践的には動き出している）をぬきにしては有り得ないのである。

議会主義と訣別した統一戦線

6・15問題に対する我々の基本的方向性は、従って明瞭である。4・1を頂点とする暴力闘争の後退の後、われわれが切開いた地平にのりながら、4・21以降地評青年部、左派社民がヘゲモニーの再確立をうちたてんとし、6・15に参院選勝利のスローガンを掲げつつ乗込んだ時、10・8以降の三派の分解の止揚を提起し得ぬまま、無防備に終ったことである。中核派の諸君の統一戦線論は「社共統一戦線か社民ー革命的左派の統一戦線か」とスターリン主義との関係でうち立てられるか、ないしは社民との統一戦線論が組織戦術上の問題でうち立てられ、帝国主義権力に対する 戦略、階級闘争 論の次元におけるその客観的位置、なかんづく、反帝統一戦線論の不在としてある。10・6 を契機とし、全学連委員長の位置にありながら、三派統一への 努力を 放棄し、反帝統一戦線を否定した上で「社民との統一戦線」を夢み、三派内部の対立を、社民にまで持ち込まざるを得ない地点まで追いこめられたことが、彼らの破産の根本的原因である。

われわれは、統一戦線が戦略と大衆闘争をつなぐ環であると考えるが故に、一月以降の70年闘争を担う戦線確立に向け、反帝統一戦線、革命的な真の統一戦線の革命的意義と総括を提出してきた（6・15～全学連大会をめぐりその革命的意義を担い切れなかったことの総括も含め）10・21以降の条件を一月以降の戦線確立へむけて、より高次の統一戦線へと高める条件は、全党派が、その総括といわゆる三派運動の基準を提出することである。

その環となっている6・15問題に対しても、中核派諸君に対しては、まず三派間の統一戦線の問題として、その総括の上に立ち、いわゆる旧三派の団結の基準を作りつつ、三派内部の対立を社民、社民翼下労働者に持ちこんだことの独自な態度表明が要求されているのである。

われわれは、一月にはじまる安保闘争に備えて反帝統一戦線ー政党間統一戦線ー全学連ー東京・全国地区反戦連合へむけ、10・21～11・7を経た今、全革命的左派の討論を、われわれの提案を機に呼びかけたい。

ニクソンの登場とアメリカ＝日本革命の現段階

侵略・反革命盟主の登場で会談破綻

ニクソン共和党大統領の登場は70年代に向け再編成されつつある国際階級闘争の動向を決定的に条件づけるものである。

彼の登場は、米ソ平和共存の解体—冷戦—米中対決を決意しきれない中途半端なジョンソンの、北爆停止↓四者会談↓大衆選挙↓カイライ政権・解放戦線の連合政権方式という路線をのっとという間に吹き飛ばし、破綻せしめてしまっ…

西独ブルジョワジーは、NATO軍強化の要請をつきつける一方ニクソンの資本自由化促進、対外直接投資規制、対日・独輸入規制、マルク切り上げ要求に警戒の目を光らせ、決然価格切上げ、輸入規制—保護主義政策との対抗を軸としていちだんと激化する対米競争戦を、日独ブロックで乗り切ろうと日本ブルジョワジーに話をもちかけている。

日本ブルジョワジーも経済面では西独とほぼ同様の位置にある。自動車、鉄鋼、繊維の輸出規制と資本自由化の強要は、日本ブルジ…

「反革命安保」として発動されるのである。

反動化する平和共存に冷戦派の擡頭

分解、再編の渦中にあるスターリニストの対応はどうだろうか。ロシア革命記念日に、臆面もなくニクソンに対して平和共存の必要性を訴えたソ連では、軍部を中心とする冷戦派の擡頭がとどめるべくもなく、対NATO、イスラエル戦線の緊張激化…へ向け軍事力強化…るい。

中共は、「米帝…ブルジョワ民主主…る政権交代劇…よる戦争挑発の…

×　×　×

ニクソン登場の国際的影響

かかるベトナム、帝国主義列強、中ソの対応にみられるように、ニ…

社学同理論合宿、全国大会、全学連決起集会へ総結集を

反戦、学園闘争の巨流を 日帝打倒・安保粉砕へ！

社会主義学生同盟全国委員会

10・21闘争をもって70年安保闘争は本格的に開始された。東大・日大闘争は、中大闘争を頂点とする従来の学園闘争の到達点を越えて闘われている。かかる運動の中から、70年安保〜70年代階級闘争の性格を摘出し、これをプロレタリア日本革命に領導しうる組織を建設しなくてはならない。

（I）

反戦闘争の質をめぐって党派闘争が存在した。日帝の反革命加担反対＝ベトナム反戦へ向いを低める路線に対して、安保粉砕＝日帝の反革命総路線対決を志向した我々の優位性は明日である。新東京タン闘争に対する防衛庁闘争の優位性は、かかる政治方針の戦術的指導性の問題として確認されなくてはならない。10・21闘争の成果の上に、我々は、70年安保闘争を1月日米会談粉砕日米共同闘争、3月自衛隊三軍合同演習阻止闘争、7月ASPAC東京会議粉砕闘争、更に佐藤訪米阻止闘争へと推進していくであろう。

「三派」全学連の分裂、「反帝」全学連大会の混乱を主体的に総括し、我々は、安保粉砕・日帝打倒の統一戦線を提起した。それは、安保・NATO粉砕・ベトナム革命勝利の国際統一戦線の一環である。かつ、党派間統一戦線を媒介に、70年安保を頂点とする日帝の攻撃に対する大衆の自然発生的反発を全面的に吸引し、党派闘争＝戦略論争を媒介に、大衆の階級形成、新たな階級的統一を目指すものであった。だが、諸党派は

10・21闘争への権力の弾圧（治安会・デモの全面禁止）を前に、明治公園での統一集会＝中央闘争を放棄し、かつ、統一戦線の誤りを全面暴露した。彼らは、明治公園から逃亡し、中大での統一集会を主張することによって、権力との対決を通して、大衆を階級形成することをの低めんとし、更に、最終的には、協定（中央闘争の放棄）を無視して、新宿闘争へ走り、統一戦線を党派間ブロックと同心円的党派拡大戦術として把握していることを自己暴露した。我々は、かかる諸党派の誤りを批判しつつ、1月〜3月闘争の過程で、一方に於ては党派間統一戦線を、安保粉砕・日帝打倒への協議会へ高め、これを基礎として、他方に於て、学園にこれをもちこみ、安保闘争委員会を統一戦線＝大衆闘争機関として形成し、全国地区反戦連合の結成と呼応し、全学連の統一を目指すであろう。

諸党派は、新宿闘争に決起した数万の大衆を、権力闘争へ向け指導する方向性を喪失している。われわれは、防衛庁闘争と新宿・騒擾罪闘争の即自的結合から、日本革命の型を、マッセンスト中央権力闘争として措定している。数万の大衆の自然発生的な、反戦・反権力意識を、権力中枢への対決へと政治的に領導し、地区党の強化、拠点経営細胞の強化と結合しつつ、日本革命の現実性を物質化していくであろう。

（II）

佐世保、成田、王子、新宿、御茶前における大衆の自然発生性の爆発が、反戦・反安保と同時に、反権力であることに注目しなくてはならない。

これは69年NATO、70年安保に表現される帝国主義の体制反革命の全面化過程が、同時に、議会制民主主義体制から、強権的な国家体制への権力再編過程であることを示している。…

ニクソン政権、…したキージンガー政権、5月「革命」を粉砕したドゴール政権の性格は、ここにある。

自民党大会（11・27）総裁三選をもって形成される佐藤70年安保内閣の性格も、それであり、…

訪米阻止へ　関西地区は　飛躍する

御堂筋の力を京都、神戸へ

共産主義者同盟関西地方委員会

更に闘い強化する反戦

基地撤去の波の中で飛躍

組合左派から政治部隊へ

権力機関への展望迫る

反戦、全学連の再編強化進む

11・10闘争で東海地区反戦も烽火

大阪、首都に呼応し決起

地評、反戦会議室に門戸開放声明

全都反戦活動者会議開かる

全国地区反戦連合へむけ

中大ノ全学ストへ

学館運営費凍結をはねのけ

10・21全学ストライキを領導し大衆的実力闘争として防衛庁突入闘争を闘い抜いた中大全学に於いては、ブルジョアジーの反狂いじみた大弾圧にもかかわらず、11・7首相官邸突入闘争を保障し、今常任委員会粉砕に向けた全学ストライキの用意を始めている。

「常任委員会」—中大ブルジョアジーの学費闘争の敗北の総括として、そして又70年対策として設定されたこの委員会こそ、佐藤政府による個別大学権力の帝国主義的再編の内実としてある事を、我々は、はっきりと見抜いている。すなわち、評議員会の決権を握り理事会をカイライ化しめ、教授会の無力化し、学生自治会への弾圧策動を…

今秋の月に入って早々から、開始された学生会館の管理運営の連続闘争は、すでに常任委員会粉砕闘争は、今、全大衆的に展開しつつある。

全国社学同総決起集会開かる

十一月六日午後七時すぎ、全国社学同総決起集会が、七日の安保第二波（沖縄・首相訪米阻止）首相官邸攻撃闘争にむけて、中大学生会館で、約三百名の学生を結集して行なわれた。…

第一次五〇〇万円の救援カンパを訴える

共産主義 第12号

11月23日発行（三〇〇円）

主な内容

■当面する情勢と同盟の任務（第四回中央委員会議案報告）■八月国際反戦集会の総括■日本帝国主義と70年安保■全学連運動の任務は何か■チェコ問題と国際共産主義運動■アメリカ資本主義の危機の諸特徴■フランス五月革命の教訓

田中吉六著

主体的唯物論への途

B6判上製／三〇〇頁／定価八〇〇円

板倉聖宣著

科学と方法

—科学的認識の成立条件—

B6判／上製／八〇〇円

季節社　東京都小山七—十六—二　電話東京（七八二）八三四六